

平成22年度

国営滝野すずらん丘陵公園の全園開園について

滝野の森ゾーンの紹介と冬季利用について

札幌開発建設部 国営滝野すずらん丘陵公園事務所 工務課

高橋 勝宏
櫻庭 満
篠宮 章浩

国営滝野すずらん丘陵公園は平成22年5月22日に滝野の森ゾーン西エリアが供用されたことで全園開園した。本報では滝野の森ゾーンの紹介及び「ふゆトピア」事業の実践の場として積極的に活用されている「滝野スノーワールド」について発表する。

平成 21・22 年に供用した滝野の森ゾーンは、人と森との関係を積極的に捉え、豊かで多様な環境の育成に取り組む東エリアと、森や沢・湿地での、美しい草花の鑑賞や多様な生きものとのふれあいを通して、自然と人とのかかわりを体感することができる西エリアとで構成される。

「滝野スノーワールド」では冬季の利活用として歩くスキーやファミリーゲレンデ、チューブそり、スノーシューなどの多様な活動施設やソフト施策が展開されている。

キーワード：国営公園、全園開園、冬季の利活用、ふゆトピア

1. はじめに

全国 17 箇所で開催されている国営公園の一つである国営滝野すずらん丘陵公園（以下「滝野公園」）は、豊かな自然と積雪寒冷地である北海道の特徴を活かした公園として、札幌市をはじめとした道央圏及び道内・道外など多くの方々にご利用されている。また、平成 21・22 年に滝野の森ゾーンが供用され全園開園（395.7ha）となった。本報では滝野の森ゾーンの紹介及び「ふゆトピア」事業の実践の場として積極的に活用されている「滝野スノーワールド」について述べる。

2. 滝野公園の概要

滝野公園は、北海道の約半数の人口を有している道央圏に位置し、札幌市の中心部から車で約 30 分の距離にある（図 1）。

当公園では、「自然とのふれあい」を基本テーマとし、札幌近郊にありながら自然豊かな滝野地区の環境保全と多様な利用者層のニーズに答えるべく、北海道の特徴を活かし、また四季を通じた公園利用を図ることを基本理念としている。

滝野公園の整備・運営にあたっては、森林・草原・芝生から導かれる「緑」、滝・渓流から導かれる「水」、そして雪・氷から導かれる「白」の 3 つの基本イメージを軸に以下の基本方針に沿って実施している。

- 1) 滝野公園にふさわしいレクリエーション活動の導入
- 2) 四季変化の強調と活用
- 3) スケールを活かしたおらかな景観構成
- 4) 自然資源の保全と活用



図1 滝野公園の位置

- 5) 多様な利用者層に対する施設と活動の導入
- 6) 新しい社会づくりへの貢献

3. 滝野の森ゾーンについて

滝野の森ゾーンは平成 21 年 6 月に開園した東エリア（121.5ha）と平成 22 年 5 月に開園した西エリア（81.9ha）に分かれる。

1) 東エリア

東エリアは人と森との関係を積極的に捉え、豊かで多様な環境の育成に取り組むゾーンである。主要施設や沢筋までバリアフリー対応になっており、幅広い利用者層を対象とした多様な環境プログラムを提供する。

主な施設としては次の 3 つが挙げられる。

1) 森の交流館

滝野の森ゾーンの情報提供、特に南向き斜面の森での観察・学習拠点や、森と人との交流、ボランティアスタッフや公園利用者など人と人の交流の中心となる施設。

(写真1)



写真1 森の交流館

2) 森の教室

利用者が森や教室前に広がる小池に触れ、体験することにより、水辺の明るい森を楽しんだり、滝野の森の散策での休憩場所などとして利用出来る施設。(写真2)



写真2 森の教室

3) ねずみのみち

ねずみの巣をモチーフにした形状となっており、子供がねずみのスケールを疑似体験しつつ、這う、よじ登る等様々な動きをしながらねずみの視点で森を見ることを目的とした施設。(写真3)



写真3 ねずみのみち

この他に滝野の森周辺を約15mの高さから展望できる森見の塔、家族や団体での野外炊事を楽しむことができる森の炊事広場、カラマツデッキ・森のデッキ、また遊具としてローラー滑り台がある。

2) 西エリア

一方の西エリアは森や沢・湿地での、美しい草花の鑑賞や多様な生きものとのふれあいを通して、自然と人とのかかわりを体感することができるエリアである。インフォメーションセンターとして、情報発信機能や野外活動の拠点施設としての役割を担う森の情報館がある。

(写真4)



写真4 森の情報館

西エリアは更に3つのエリアに分けられる。

1) 野と水辺エリア

復元された水田(写真5)やため池・草地など人との関わりによって維持された二次的自然の風景や、その生息する動植物を観察することが出来る。



写真5 復元された水田

2) 花と水辺エリア

野牛沢川の清流のせせらぎや大木の河畔林など変化のある景観を一望できる森の観察デッキ(写真6)や谷の傾斜や河畔に咲くシラネアオイ(写真7)が楽しめる。



写真6 森の観察デッキ



写真7 シラネアオイ

3) 花の溪流エリア

蛇行する野牛沢川と河畔林、斜面林と一体となった美しい溪流景観やミヤマエンレイソウ・ヤナギラン(写真8)などの野草が観察できる。



写真8 ヤナギラン

4. 滝野公園における冬季利活用について

4.1 滝野スノーワールドの意義

北海道においては、積雪寒冷地であるが故に、冬期間のスポーツやレクリエーション活動の制約が多い。滝野スノーワールドを活用することで、「北海道の“ふゆ”を楽しめる場」として提供していくことが、全国にある国営公園の中でも積雪寒冷地に整備された滝野公園の役割・使命であると考えます。

4.2 開園形態

滝野公園は、夏季開園と冬季開園が明確に区分されているが、全国 17 箇所で開催されている国営公園の中で、この開園形態を持つのは国営越後丘陵公園と滝野公園の2箇所だけである。(表1)

公園内には多種多様な施設が整備されているが、夏季と冬季では設備の設置替えを行うため、大きく利用形態が変化する。そのため、利用者にそれぞれの時期の園内施設を分かりやすく伝えるために、夏季・冬季2季分のマップを作成し、リーフレットやホームページ等で情報発信をしている。(図2)

表1 滝野公園の開園形態

開園形態	開園時間	期間
夏季開園	9時～17時	4/20～5/31・9/1～11/10
	9時～18時	6/1～8/31
冬季開園に向けた準備休園	-	11/11～12/22
冬季開園	9時～16時	12/23～3/31
夏季開園に向けた準備休園	-	4/1～4/19

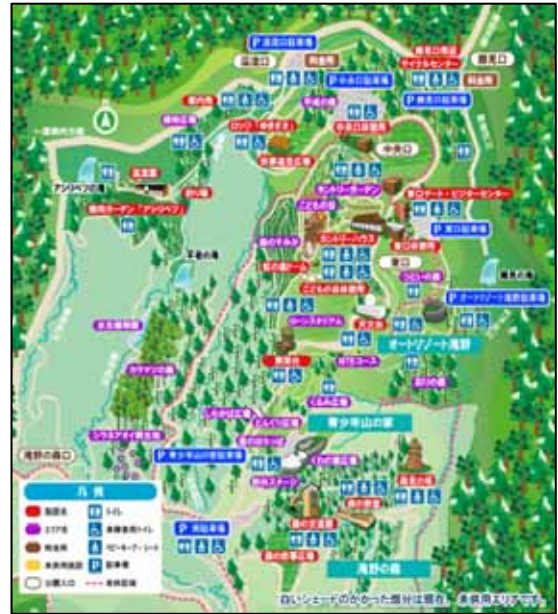


図2 夏季マップ(上)と冬季マップ(下)

4.3 歩くスキー

積雪寒冷地では全国初の国営公園整備となった滝野公園は、昭和53年の計画当初から歩くスキーコースの整備を検討していた。当時、既に市民権を得ていたゲレン

デスキーに比べて、歩くスキーは市街地の公園などの一部で利用される程度であった。滝野公園のような丘陵地の高低差のある場所で、競技用としてではなく、広く市民が利用できるコースを整備することは、一般には考えにくい時代でもあった。このような背景の中で、昭和61年に国営公園では初めての試みとして、開園エリア全域に及ぶ5・10・15kmの歩くスキーコースと、併せてスロープを利用したそりゲレンデを開設した。いずれも冬季以外は、散策園路や遊戯広場として利用している場所を、冬季利用のために設備を替え、整備したものである。

その後、開園区域を拡張していき、平成7年1月には、オートキャンプ場内に、歩くスキーの休憩所として活用できるセンターハウスを完成するなど、基本理念に掲げられた「四季を通じた公園利用」の具現化を進めた。平成10年1月には歩くスキーコースを拡張し、更に今年度の全園開園に伴い、上級者に人気が高かった15kmコースを見直し、より充実した16kmコースに再整備するなど、常に利用者ニーズを反映した整備を行っている。

(図3)



図3 歩くスキーコース図(16kmコース)

また、毎年開催している「歩くスキー大会」では、上級者の他、家族連れなど、500人前後の幅広い層の参加者を迎えている。(写真9)(図4)



写真9 歩くスキー大会の様子

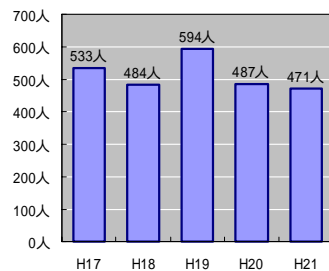


図4 歩くスキー大会参加者数

4.4 ファミリーゲレンデ

滝野公園の特徴である大きな標高差を持つ波状地形は、約3万2千年前に大噴火した支笏火山の火砕流による堆積物が長年風化して形成されたものである。滝野公園では、この緩やかに波打つ地形を活かした公園施設整備を展開している。その代表的な施設は傾斜地を利用したファミリーゲレンデである。夏季は斜面全体で季節の花々を楽しむことができる花畑(カントリーガーデン)として整備を行い、冬季は幅の広い緩やかな傾斜を活かしたファミリー向けのスキーゲレンデとして、同じ場所で季節ごとに異なる利用形態とすることで、利用者にとってわかりやすく、また効率的にサービスを提供している。(写真10)



写真10 夏季・カントリーガーデン(上)と冬季・ファミリーゲレンデ(下)

札幌近郊のスキーゲレンデは、緩い斜面でも平均斜度が10度以上のところが多い中、同公園のスキーゲレンデの平均斜度は7度と非常に緩やかであり、初心者・ファミリー向けのゲレンデとして人気が高い。

ゲレンデの上下にレストラン、ロッカー、トイレ、そして授乳室やキッズルームを備える施設を、3箇所(カントリーハウス、東口休憩所、中央口休憩所)整備し、幅広い層の利用者や家族全員が安心して、ゆったりと過ごすことができるゲレンデとなっている。また、最近では、スキー経験が無い児童などを対象にした滝野野スキースクールを開催している。(写真11)



写真11 滝野スキースクール

4.5 そりゲレンデ

すずらんの丘展望台から、こどもの谷にかけての広大な丘陵斜面は、夏季は人間と同じくらいの大サイズのゴム製ボールを転がす「ピクリボール」を楽しむことができるローンスタジアムとして、冬季はスケールの大きいそり専用のゲレンデとして整備している。（写真12）



写真12 夏季・ローンスタジアム(上)と冬季・そりゲレンデ(下)

そりゲレンデには、斜面に雪で成形したチューブそり専用コースが6本あり、チューブに乗ったままスロープを上ることができるロープトウも2基整備している。また、ロッカー、レストラン、トイレ等を備える「こども

の谷休憩所」や、冬季の休憩・採暖施設であると共に、大きな屋内ネット遊具で一年を通じて遊ぶことができる「虹の巣ドーム」も整備し利便性を更に高めている。（写真13）



写真13 虹の巣ドーム

4.6 冬季利活用のソフト展開

こうした冬季利活用促進に向けたハード面の整備と平行して、各種ソフト面での取り組みも行っている。昭和62年からは、雪の積極的な活用と、冬季における魅力あるレクリエーション活動の充実を目的として、「滝野スノーフェスティバル」を開催している。会場では、雪を資源ととらえ、雪の滑り台をはじめ、スノーシュー（写真14）を履いて園内を散策するガイドツアーや馬そり体験、雪合戦大会、公園内で実際に使用している除雪機械の展示、また冬の経験が少ない親子を対象に、屋外での服装や遊び方等を学べる子育て支援プログラムを用意するなど多様な取り組みを行っている。



写真14 スノーシュー

5. 滝野公園における外国人観光客への対応

近年、冬季の北海道観光動向で特筆すべき事項は、外国人旅行者の急増である。とりわけ、台湾、中国（香港）、韓国を中心とする東アジア圏からの来訪が全体の78.2%と顕著である。（図5）

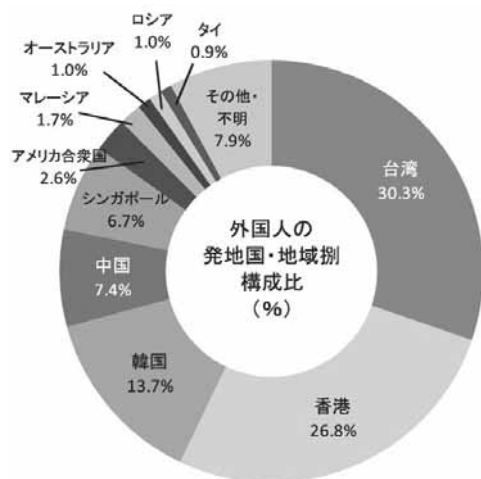


図5 国・地域別外国人宿泊者構成比(冬季) (札幌の観光21版より)

冬季における北海道の魅力は、アジア圏では珍しい「雪あそび」が観光資源となっていると推測される。滝野公園では平成19年度から冬季の魅力をもっと多くの観光客に周知する取り組みとして、「来道外国人への満足度向上」と「アジア圏へ北海道の魅力発信」を関係機関と連携して実施した。例を挙げると4カ国語による冬季利

用ガイドブックの配布と、旅行会社への周知強化などである。4カ国語による冬季利用ガイドブックは、観光案内所やホテル、旅行会社などへ配布し、積極的に滝野公園を紹介している。また団体旅行では、滝野公園をツアーに組み込み、手軽な雪あそびの場として外国人観光客の誘致にも力を入れている。

6. おわりに

滝野公園は平成22年5月に滝野の森ゾーン西エリアを供用し全園開園した。これに先立ち今年度から市場化テストを導入し、民間業者が収益施設も含め管理運営を行っている。

市場化テスト導入により従来の運営維持管理業務と同程度の個別業務の最低水準のみならず、達成状況や効果である包括的な質や個別業務の質を求めている。例えば利用者数の確保や利用満足度の向上、多様な利用プログラムの提供などである。

全園開園と市場化テストを機に、より多くの方々に親しまれる公園となるよう、また「ふゆトピア」事業の一環である滝野スノーワールドを多くの方に利用してもらおうよう努めていきたいと考える。